

Annie Laurie

アニー・ローリー

ザ・スコラーズ イギリス民謡を歌う

SIDE 1

1. アニー・ローリー Annie Laurie (スコットランド民謡)3'16"
2. スコットランドの釣鐘草 Bluebells of Scotland (スコットランド民謡)1'47"
3. ロンドンデリーの歌 The Londonderry Air (アイルランド民謡)3'02"
4. ボビー・シャフトー Bobby Shaftoe (イングランド民謡)0'46"
5. 恋人にリンゴを I will give my love an apple (イングランド民謡)1'55"
6. 故郷の空 Comin' through the rye (スコットランド民謡)1'55"
7. ある朝早く Early one morning (イングランド民謡)3'16"

SIDE 2

1. スカボロ・フェア Scarborough Fair (イングランド民謡)3'54"
2. 酔っぱらいの水夫 The drunken sailor (イングランド民謡)1'44"
3. アフトン河の流れ Afton water (スコットランド民謡)3'20"
4. ヘイホー、風も雨も Hey ho, the wind and the rain (イングランド民謡)2'34"
5. リッチモンド・ヒルの娘 The lass of Richmond Hill (イングランド民謡)2'02"
6. グリーンスリーヴス Greensleeves (イングランド民謡)2'43"

THE SCHOLARS



制作にあたって

日頃は第一家庭電器をご愛顧いただき、誠にありがとうございます。また第25回頒布会を迎えることができましたことも会員の皆様の変わらぬご支援の賜と、重ねてお礼申し上げます。

この頒布会のカートリッジ・チェック用として制作したDAMレコードも、今回で43、44種類となりました。(他にVIP45が8種類あります。)

さて今回は、5月のチャールズ皇太子・ダイアナ妃の来日で、英国ブームが巻き起こりましたが、そのイギリスのボーカル・アンサンブル「ザ・スコラーズ」による、イギリス民謡集を、DAMオリジナル録音第20弾としてお贈りします。

アニー・ローリー、スカボロ・フェア、グリーンスリーヴス、ロンドンデリーの歌、故郷の空、スコットランドの釣鐘草、等馴染み深い曲を含む全13曲の、スコットランド、イングランド、アイルランドの民謡の数々は、きっと皆様に、子供の頃のなつかしい日々を思い出させてくれることと思います。

日本では、イギリスのボーカル・アンサンブルとしてキングス・シンガーズが大変有名ですが、このザ・スコラーズもキングス・シンガーズと同じ、ケンブリッジ大学のキングス・コレッジの聖歌隊の出身で、来日も5回を数え、その人気も急上昇しております。

キングス・シンガーズとの大きな違いは、ザ・スコラーズが、女声(ソプラノ)を含む、テナー、カウンター・テナー、バスの四人編成であることです。そのレパートリーは、中世やルネッサンス音楽はもとより、現代曲、黒人霊歌と巾広く、とりわけイギリス民謡のアレンジしたものを得意としていて、ザ・スコラーズの日本デビュー・アルバム「ザ・スコラーズ／イギリス民謡集」(EWC-90170)として東芝EMIより発売され好評を博しています。

今回の来日にあたり、東芝EMI市販の第3作目のアルバム録音と、DAM45用の録音とを共同制作することになり、本年('86)1月13日と15日の2日間に渡って、本郷のバリオ・ホールでレコーディングいたしました。(既に3月に発表したVIP・CD「岩崎洗◎白鳥」はこの5日前に、同じバリオ・ホールで録音されたものです。)

録音当日は、かなり寒い日でしたが、空調雑音を避けるため、暖房を止めての録音は、スコラーズのメンバーの皆様に大変お気の毒でした。チェロとピアノのような通常の楽器演奏でも大変なことと思われるのに、生身の肉体が楽器であるザ・スコラーズが、無伴奏(アカペラ)にもかかわらず、絶妙なハーモニーを維持して、全21曲を2日間で収録できたことは、日頃のプロとしての鍛練の厳しさを垣間見る思いがいたしました。

DAM45の13曲中、一部の曲目が先の市販レコード、「グリーンスリーヴス」と重なっていますが、今回の録音ではバリトンが入っていないことと、ソプラノが変わり、アレンジも新しくなっているので、大分、趣も変化しています。

ザ・スコラーズの日本録音は、前2作ともスタジオでのデジタル録音でしたが、今回はよりナチュラルにレコーディングするため、ホール録音となりました。デジタル録音も同時に行いましたが、DAM45用には、 $\frac{1}{2}$ インチ巾76cm/sec 2チャンネルのアナログ録音をいたしました。現時点では、マスター・レコーディング段階のトータル・サウンドとしてアナログ録音の方が、ナチュラルな響きで優れているため、この種の音楽では珍しくなったアナログ録音が続いています。しかし $\frac{1}{2}$ インチのテープのコストが、デジタルのVTRテープに比べて著しく高く、この辺のコスト・アップも国内のアナログ録音が激減した一因なのかも知れません。

DAMとしては、デジタル録音がトータルサウンドの点で、アナログを越えるという評価がされるまで、アナログ録音を続け、稀少価値となりつつある、最新アナログ録音による純粹スーパー・アナログ・ディスクを制作していきたいと考えています。

又、今回は、録音時の $\frac{1}{2}$ インチ巾のマザー・テープをハサミだけで編集し、何の加工もせず、そのままカッティング用のマスター・テープとしました。更に録音時に使用したデッキをそのまま再生機として、ノン・イコライザー、ノン・リミッターで、ストレート・カッティングするという、極めてシンプルな方法で、マザー・テープの持つフレッシュで、クオリティの高いサウンドをそのままレコード化できるよう努めています。

再生にあたっては、勿論、どんな装置でもザ・スコラーズの素晴らしい演奏をお楽しみいただけることと思いますが、オーディオ的には、ザ・スコラーズの声質ともあいまって、アカペラのボーカル・アンサンブルが、かなりシビアに収録されていますので、ややもするとその微妙なバランスが崩れやすくなります。

カートリッジを含む装置のクオリティと、再生に細心の注意を払っていただくと、ホールの広い空間の中に、ナチュラルかつ透明なハーモニーが微妙な変化と解像度の高さを伴いながら融け込んでゆくのを、味わっていただけることと思います。

なお、今回のアルバム制作にあたり、ザ・スコラーズ、東芝EMI様ならびに関係各位に多大な御協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。

今後もDAMといたしましては、アナログ、デジタルを問わず、より良い音楽ソフトを開発し会員の皆様に少しでもお役にたてるよう、更に一層の努力をする所存ですので今後とも皆様のご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

DAM推進委員会



ソプラノ: キム・アムプス
Soprano: Kym Amps



カウンター・テナー: ナイジェル・ディクソン
Counter tenor: Nigel Dixon

真庭 健

この5月、日本はまだでイギリスの植民地のようなありさまでした。チャールズ皇太子・ダイアナ妃の訪目を迎え、デパートはこぞって「英国フェア」「英国物産展」を開き、関連記事は女性雑誌の特集にとどまらず、朝日新聞でさえ5月8日朝刊には8ページの「英国特集」を別刷でくっつけちゃうフィーバーぶり。この、日本人ならではの、明るく軽いノリって、ヒョーキンでカワユくてスキ。ま、ともかく、おかげでわれわれ日本人、ずいぶんとイギリスのことを勉強しちゃいました。わたくしだって、ダイアナ妃が岩崎良美と同じ年であり、なおかつツメを噛むくせがなかなか止められぬといった、~~秘~~の数々を知っております (NON・NO「ダイアナ妃おもしろクイズ!!」による)。けれども前述・朝日の「特集」にしたところで、「伝統と新しさの多重奏——そして生きる誇りのある国」を大見出しに8ページ、一応は読んでみましたが、うわつらをなぞっただけ、別にどーとゆーことないんですわ。強く印象に残ったことといえば、ダイアナ妃が着た柄をそっくりパクったセーターが「カジュアルなのに気分はリッチ／プリンセス・ダイアナ《ブラックシープ・セーター》」と名づけられ、来日記念に特別に御1名様1着限りで通販され、その価格が27,500円、ワッ、高い！ということでありました。

なぜかイギリス、一応の知識は持っているものの、今一歩踏み込んでの共感がわかない国のひとつじゃないかしら。フランスやイタリア、はたまたドイツ・ロマンチック街道に憧れる女の子はいっぱいいても、ロンドンやスコットランドの奥へ行きたい、なんて人は、ま、あまりいません。簡単にいえば、なんかなじみにくいんですわ。

音楽にもいえます。クラシックを聴く人で、ブリトウン「青少年の管弦楽入門」、ホルスト「惑星」、エルガー「威風堂々」以外に、イギリス音楽、ひとつでも愛聴する曲があるヒト、これはもう相当なツーといつてよいくらい。この3曲はいずれも20世紀に入ってから作品、従ってわれわれは、大陸でハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスを輩出した、あの豊かな時代の、ことイギリス音楽について、殆どなじみがないんですね。実際、19世紀のイギリスは産業革命で突っ走り、20世紀に入るまで、自前の文化を育てるゆとりがなかった、といえるみたい。けれど、じゃイギリスの風土が音楽的に不毛であったか、といえば、それは違う。先に名を挙げた作曲家(ベートーヴェンを除く)をはじめ、ヘンデル、メンデルスゾーン、J. シュトラウス、ドヴォルザーク、チャイコフスキーといったビッグ・ネームが、たびたびイギリスを訪れ、大喝采を博していた。つまりは音楽消費は経済力にモノいわせ、大陸からの輸入に殆ど依存していたというわけで、ここら辺の事情はなにやら今日の日本に似ていなくもありません。18～19世紀にかけてのイギリス音楽に、はくらなじみがなくとも、無理ない話。

結局私たち日本人にとって、イギリス音楽は縁遠いものなのかといえば、実は、違います。ビートルズ以来のポップス。これはイギリス産が日本でも大ウケなのはおじさんも知ってる。最近でも、デュラン・デュラン、カルチャー・クラブ、ワム、ジグ・ジグ・スプートニクといった方々が、はるか極東のティーンエイジャー

までもキャーキャーいわせてる。同様に、いやそれ以上に、100年も前・明治時代から子供達に親しまれたのが、イギリスに生まれた歌の数々でありました。「殖生の宿」「庭の千草」「故郷の空」「螢の光」…。原詩を翻案したものもあれば、全く別の叙景詩をつけたものもある、いずれにせよ格調やけに高い日本語の詩が付され、まぎれもなく日本の歌に生まれかわって小学唱歌に収められて、広く親しまれてきたこれらの歌が、実はイギリスのフォークソング、或はポピュラーソングであった、というわけ。近代日本人の感性形成に、寄与するところ大でありました。

フォーク(・ソング)といえば、もう反射的にフォーク・クルセダーズ、シューベルツ、森山良子なんて名前を想い浮かべる世代、である。'60年代半ば、ベトナム反戦の気運の高まりとともに、新宿西口の地下広場は土曜の夜ごとに、ツトメ人までまき込んだ歌の輪ができて、「よあーけわぁかい〜」「ウイシャルオーバーカム」なんぞと、ギターにあわせて歌ったもんです。(あー、恥かし。) ともかく、「フォーク・ソング」といえば土着の古謡、と思いがちだけれど、作者のあるなしに限らず、楽譜によるのでなく歌われることにより、広まり、伝えられていく歌、と考えれば、土曜夜の歌声広場は、まさにフォークしていたといえますね。逆に言えば、歌いつかれることにより、起源や作者なぞどうでもよくなったもの——これがフォーク・ソングなんですな。

このレコードでできくフォーク・ソングも、恋の歌、子守唄、作業歌と内容は様々ですが、いずれもが人々に親しまれることで、今日に伝わってきたものばかり。長い時の流れの中で、メロディは少しずつ変化してゆき、また歌詞も時代に即した意味を盛り込まれつつ、愛唱されてきました。本来なら一地方に伝わるこれらの歌が、イギリスでは20世紀に入り、(ハンガリーでコダーイやバルトークが果たしたように) セシル・シャープ、レイフ・ヴォーン＝ウィリアムズ、パーシー・グレンジャーといった作曲家たちが地方をまわり、採譜し、出版し、或いは管弦楽に編曲することで、より多くの人々に親しまれるものになりました。

フツの日本人にとってイギリスといえば、シェイクスピア、マザーグース、ビールにスコッチ、ロースト・ビーフに紅茶、といったイメージからなる、ひとまとまりの国家のように思っちゃいます。ところがどっこい、正式名称「大ブリテンの連合王国及び北アイルランド」United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland からも解るように、実は、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドと、4つの国からなる連合体なんですわ。となれば文化も、当然音楽も、「イギリス」(Englishの訛ったもの) なぞという、考えてみればイー加減な呼称でひとまとめにできぬ「お国ぶり」があらうというもの。このレコードには、イングランドの西に位置するウェールズを除いた、3つの国の歌が収められています。

スコットランド——
大ブリテン島の北1/3を占め、首都は音楽祭で名高いエジンバラ。バグパイプ、スコッチ・ウィスキー、ネス湖の恐竜でおなじみで

すが、イングランドとは長い戦いの歴史を持っています。その歌はスコッチ・スナップと呼ばれる明るく弾んだ付点リズムが特徴。実在した女性への想いが歌われる〈アニー・ローリー〉、戦さに出た若者への想いを歌う〈スコットランドの釣鐘草〉、なじみ深い〈故郷の空〉、R. バーンズ、A. ヒュームの詩・曲による〈アフトン河の流れ〉が同地のもの。

イングランド——
ロンドンが現在、イギリスの政治・経済の中心地であるところから、ついイギリス＝イングランドと思いがちだけれど、実はその文化は、海峡を渡って流入した異民族文化のブレンドによって、形づくられてきました。〈ボビー・シャフトー〉はスコットランドに近い東北部起源のため、バグパイプの効果を模したアレンジ。サイモン＆ガーファングルにより有名になった〈スカボロ・フェア〉、そして〈グリーンスリーヴス〉はおなじみです。〈酔っぱらいの水夫〉は船乗りたちに伝わった作業歌。他に〈恋人にリンゴを〉、失恋を嘆く〈ある朝早く〉、シェイクスピアに由来する〈ヘイホー、風も雨も〉、L. ナリー詩、J. フック曲〈リッチモンド・ヒルの娘〉もイングランドで歌われてきたもの。

北アイルランド——
1937年、小ブリテン島ともいわれるアイルランドは、共和国として独立。その際、北部の6州が大英連合に留まりました。しかし現在、その6州からなる北アイルランドと英政府との間で内紛が絶えないことは周知の通り。ここに収められた〈ロンドンデリーの歌〉は、もともとアイルランド古来のゲール語で歌われたもの。後になり、英語により様々な詩がつけられ(例えば〈ダニー・ボーイ〉) て広まったが、スコラーズは歌詩をつけずに歌っています。

古くからイギリスでは、「キャッチ」と呼ぶ輪唱や、ハモって歌う「グリー」といった歌が、一般家庭の楽しみとして歌われてきました。その合唱音楽への嗜好は、一方で教会音楽——聖歌隊として高いレベルに磨きぬかれて、今日まで伝わっています。このレコードで絶妙なアンサンブルを聴かせるスコラーズも、ケンブリッジ大学キングス・コレッジの聖歌隊で歌っていた5人が集まって始めたグループ。1969年に結成され、'73年ウィーンのコンサートで一躍名を挙げた彼らは、現在、キングス・シンガーズとならび、ヨーロッパ第1級のヴォーカル・アンサンブルと評価されています。一部に入れ替えがあったものの、ソプラノを除く男性3人は、結成以来のメンバー。'79、'81、'82、'83に続く'86年の来日時に、尚美学園バリオ・ホールで収録されたこのレコード、極めて優秀な録音とあいまって、歌心の愉悅にみちた1枚となっています。



テナー：ロビン・ドブトン
Tenor: Robin Doveton



バス：デイヴィッド・ヴァン・アッシュ
Bass: David van Asch

田中亮三

ザ・スcolarsについて

1979年の第1回から1986年1月でザ・スcolarsの来日は5度目となった。この種の地道な演奏活動では爆発的に人気が湧いて満員札止めになるようなことは望めないが、どの演奏会でも音楽が本当に好きな人たちが彼らの妙なる重唱に聴き入っている。

世界的に有名なケンブリッジ大学キングス・コレッジの聖歌隊奨学生たちが始めたこのグループも次々にメンバーが入れ替わり5度の来日でも全く同じメンバーであったことは1度もない。2度目まではバリトンが入っていたし、イギリス民謡集『グリーンスリーヴス』のレコーディングの時は、ソプラノがシーラ・モリニュー、2枚目の『美しいフィリス』(マドリガル集)ではポーラ・ボット、そしてこのディスクはキム・アムプスとなっているが、このグループの土台骨を成すテナー、カウンター・テナー、バスの3人は不動のトリオ、ロビン・ドブトン、ナイジェル・ディクソン、デイヴィッド・ヴァン・アッシュであり、この3人で音楽面を支えてきたと言ってもよいだろう。この3人の役割分担と連繋は絶妙と言ってもよいものがあり、繊細な神経の持主で音楽学者でもあるロビンは音楽監督の立場にあり、リーダー格のデイヴィッドはグループのスケジュールを管理し、特にすぐれたユーモアのセンスを持つナイジェルは良い雰囲気を保たせる調整役である。今回のソプラノの若いキムは重唱に向く声のようで、これからますます磨きがかかることが期待できるし、他の3人は若い彼女を妹のように温くかばいながら、入念な指導をつづけている。

彼らのレパートリーは民謡とマドリガルだけでなく、ヨーロッパ各国、各時代の歌、現代的音楽、ジャズ、ポップスに及んでいるので、さらに多くの来日と多様多彩な活躍を切に祈りたい。

曲目について

アニー・ローリー

「グリーンスリーヴス」にも収められているが、これもわが国でよく知られた曲で、朝露置く野のしじまに／いとしアニー・ローリー、君と語りぬ、は堀内敬三訳である。

アニー (1682-1764) はサー・ロバート・ローリーの娘で、恋人ウィリアム・ダグラスは父親の政敵であったために恋は実らず、のちに別の男と結婚し、周囲の人々から慕われ82歳で天寿を全うした。アニーの実家マクスウェルトン・ハウスはスコットランド南部ダンフリースシャーにあり、近くのグレン・ケイアン教会に彼女の墓があるという。

スコットランドの釣鐘草

題名もメロディーもよく知られているためにかえって歌詩に注意を払わないせいか、題名の可愛らしいがごくありふれた草花の名が、歌詩の内容には全く関係のないことに気がつかない。戦場に行った恋人のことを娘にたずねるとい同種の歌は数多くあるが、ハイランドをヒーランドと発音することでお国訛りの風味をつけている。

ロンドンデリーの歌

「ダニー・ボーイ」という題名でも呼ばれるこの曲は、クラシックからポピュラーまでさまざまな歌手によって歌われてきたが、バイオリンの独奏曲にも編曲され、レコードの名曲全集などによく収められている。このディスクではパーシー・グレインジャー

が採集した通りに、歌詩をつけずにハミングで歌っている。

故郷の空

夕空晴れて秋風吹き／月影落ちて鈴虫鳴く／思えば遠し故郷の空／あわが父母いかに在す、という歌は、明治初年を舞台にしたテレビ・ドラマ「はね駒」で主人公の少女が歌っていたが、小学唱歌に収められた大和田建樹の詩は、原作とは全く関係がない。リズムも異っていて、換骨奪胎して自分のものに造り変える日本人の特技が、ここにも表われている(またドリフターズが「全員集合」で歌っていた「誰かさんと誰かさんが麦畑／いちやいちゃしている、いいじゃないか」はなかなかの名訳であると感心した)。

スカボロ・フェア

1960年代にサイモンとガーファンクルが歌って、わが国でも大流行したので、彼らが映画「卒業」のために作詩作曲したものと思っている人が多いが、歌詩を読むとこれが現代のものではないことが一目でわかる。前記の2人はこれをスカボロと発音しているが、これはイングランドのヨークシャー北東部の小都市スカバーラのことで、フェアは今日では年に一、二度定期的に巡回して来る移動遊園地のことだが、この場合は中世から行われていた定期市で、近隣からの生鮮食料品のようなものばかりでなく、遠方時には海外からも商人たちが布、穀類、塩漬けの魚などを運んで物資の流通を行っていた。各節の2行目にくり返し出てくる"Parsley, sage, rosemary and thyme"はハーブ(薬味植物)を売る大道商人の売り声である。

この歌詩は言葉通りナンセンスで、縫い跡のないシャツを作れ、水のない泉から水を汲めとか無理難題で、竹取物語のカグヤ姫が要求する仏の石鉢、燕の子安貝などと似ている。

アフトン河の流れ

民謡はお国訛りを使っている場合があるが、ザ・スcolarsは方言の本当の音が一般の人にはきたく聞こえる恐れのある時は周到に変えて歌っている。

日本で(英国でも)良く知られている「アフトン河の流れ」と歌詩(ロバート・バーンズ)は同じだが、曲が全くちがう。一般に知られているのはスビルマンという人の作曲だが、このディスクではアリグザンダー・ヒュームの曲で歌っている。だが聴いてみると同じ3拍子でアフTONの清清流転がよく映された美しい曲であることがわかる。前記スビルマンも世に知られ口の端にのぼるのはあの1曲だけのようだが、ヒュームも不遇の一生を送った様子なので、この曲だけはザ・スcolarsを通じて歌いつがれていくことだろう。

ヘイホー、風も雨も

シェークスピアの「十二夜」の最後に、登場人物が全員退場して道化だけが残し、「本日の私どもの公演はこれにておしまい。また明日も精一杯皆様お楽しみいただきますから御来場のほどを」という後口上で、当時の芝居の多くは旅廻りで宿屋の中庭で演じ、劇場の場合でも17世紀の半ば以降の額縁舞台と異り幕がないので、こういう具合に終演を告げた。レオン・カパルロの歌劇「道化師」で、主人公の道化を演じる旅芝居の座長カニオが、嫉妬から妻のネッダを舞台の上で刺殺して、「皆さん、芝居は終わりました」という台詞も幕引きとしては同じである。ここで、ザ・スcolarsは「芝居」という言葉だけを「歌」に替えて歌っている。

江川三郎

生命維持のための聴覚

人間は自然から五感を授かって生きながらえている。このどれ一つが欠けても不自由なことは、不幸にしてそれを失った方がたを見るにつけても、いかばかりのご苦労かと察しがつくものである。聴覚、視覚、味覚、触覚、臭覚のそれぞれを人生の楽しみに活用させているのはもちろんだが、われわれの生命維持にも欠かせないものであることはいうまでもない。いったい五感のいずれが基本的に生命維持に大切なものかよく議論するのであるがどうも決定的な結論には至らないまま終わってしまうのが常である。だいたいのところまとまりかけているのが生を保つために最も大切な感覚としては聴覚ではなかろうかということになっている。笑い話のような話になるが、もし人間が熟睡していて火事が起きたとするとそこで気付くのは五感のうち何が最初に働くかで決まってくるのではないかという考え方だ。煙の臭いでは遅すぎる。熱いノという触覚ではなおさらのこと。目はもともと閉じているとするとたよりになるのは聴覚ではなかろうかというのである。アラーム・ベルはそのために考えられているのではというものである。こんな話がでると、いつも私はいい出す話がある。昔、武芸者が何者かに物陰や背後から襲われた時に殺気を感じてやにわに身をかわしたとか、何んとかして反撃をしたといった講談の話がある。神技めいた物語の世界と考えていたが、最近はその思わなくなった。われわれは武芸者ではないが物事を知覚する感覚のうち聴覚を使ってかなりの作業が出来るのではないか。もし、われわれに何者かが音も立てずに迫って来たとする。一人の体の面積が働けば気圧の変化が起る。人間の聴覚は16ヘルツから2万ヘルツまでが知覚されるとしているが、それは純音の話であって動的にさまざまな音波が重畳されればさらに知覚の範囲は広がるという研究がなされている。だから気配と抽象的にいわれる人間の動きでも物理的な変化として人間は知覚しているのではと考えている。

聴覚の目的、オーディオ・チェック

そんなに厳しい話ではなくても、われわれの知覚は生まれ落ちた時から母親を求める大切な要素として習練を積んでいる。聴覚の基本目的は母親の声を聞き分けることである。成長するに及んで兄弟や友人達を区分けして楽しい幼児時代を過しているのである。これからすると聴覚の基本は人間の声を聞き分けることと考えてもよからう。かつて私は満員電車の騒音の中で聞き覚えのある咳ばらいの声を聞いた。とたんに「おやじが居る!」と思った。人をかき分けてゆくとそこには年老いた父親がまさに座っていたのである。このことで私は人間の聴覚の鋭さ、記憶力のたしかに今さらながら驚いたのである。もちろん私の聴覚のよさを自慢しているのではなく、全般的な話をしているつもりである。いつも主張していることだが、自然ないし神は人間の五感を平均的な能力に作ってくれている。現実私がとくに興味を持っている聴覚についていえば、知覚の度合は誰も同じであると考えている。世の中でいう耳のよしあしは良否の問題でなく気が付く時間が早いか遅いかだけのことである。この早く聞きつけるかどうかに対して好奇心が強いとか、習練がつまれているかどうかの差が世の中でいう耳がよいという定義につながってゆくのだと思う。

このオーディオ・チェックという問題について最近になって私は聴覚は人間の声を聞き分ける第一目的をもっと大切にしたいと主張している。オーディオ装置やレコードを聞き分けるということについてはわれわれは当然のように音楽を持って来る。もちろんそれでもよいのだが、音楽はもともと人間の心に訴えかけるように作られている。機械のよし悪しを聞き分けるのみのつもりが時間が経るに従って音楽の情緒的な世界に入っていってしまう。この音楽に対しては、私の好みでいうとこっちの機械の方がよいなどという中途半端な判断になってしまうのが常である。

リアルタイム・リスニング

人間の発した言葉にわれわれは最も敏感であるというこの特性を利用して、私は同時検聴法という音を聞き分ける方法を皆さんにすすめている。はじめはステレオ装置の特性チェックからはじめられた。人間の声をステレオに入力するためにマイクロフォンが必要である。手持ちのどんな製品でもたいてい役に立つ。この出力をそのままアンプのライン入力（チューナー等の補助端子）に入れる。プラグの形式が違うが簡単に短いケーブル付きピンプラグを輪ゴムでしっかり巻き付けてもよい。アンプのボリュームを上げてゆくとちゃんとスピーカーから声が出て来る。最大にしても人間のしゃべる声ぐらいではあるが、音質の判定に十分な音量である。さて、ここで何の判定をしようか。アンプやスピーカーに悩みを持っている人達は、他のものとそれを交換してみる。A B比較法という最も厳しい判定法である。誰に聞いてもらってもAとBでどちらがしゃべっている人間の声に近いかはほとんど瞬間的に判断できることである。訳け知りの人の中には「人間の声は音域巾が狭い」といわれるだろうが、実はそうでない。体の大きい人が特有の声を持っているのは音域の低い成分を持っているからだ。それが中音域のレベル分布よりも極めて小さいから無視してしまう。こうした部分もマイクが拾い出すととたんに声が似て来るのである。

こうした作業は家族や友人と組になって行くと判定の客観性が出て来る。音源が音楽でないから好みによつての違いが出にくいのも特長である。こうしてしばらく組んだ人達と意見交換をしているうちに、マイク、しゃべっている人間、つまり自分と他人の判定がまったく一致していることに気付かれるだろう。つまり、この同時検聴法はまったく一人でも出来る作業なのである。人間のしゃべりとそれを聴くことは骨伝導があって自分の声はそのままには聞えぬ、というように教えられている。それはほとんど間違っている。もちろん骨伝導はあるが、口から耳へと空気を伝わって来るレベルの方が圧倒的に大きいから、今聞えている自分の声は他人にもそう聞えていると考えた方がよい。ためしに指で自分の耳を塞いでみて声を出す。ぼそぼそとこもった声が聞える。これが骨伝導成分だ。

こんな具合に人間の声をステレオ装置に通して調べてゆく。そして人間の声がそれらしく聞えるようになったとする。実はこれが大変にお金がかかったり、手間ひまの要ることなのであるが、その結果はステレオ装置の音は実にすっきりした音というか、あっさりした音になって来る。人によっては音楽のイメージが生ま

れないということもあるし、物足りないとする場合もある。

ここで考えねばならぬのはわれわれが音楽ないし音について何を基準に価値判断をしているのだろうか、ということだ。よもやそんなことはないだろうが、幼い頃から聴いていたステレオ、友人の有名で高価な装置に馴れ親しんで、自分では気付かぬうちに脳裏の中に刷り込まれてしまっていないだろうか。「いや、俺は絶対にそんなことはない。劇場体験もしている」という人も多いだろう。実体験の中味を分析してみると、映画館であったり、P Aシステムから流れている音響が多いということも考えてみなければならない。もちろん、そうした電気音響のなかにもよい音はあるのだが、これを基準にすることは危険が多いことは誰にでも判ることだろう。

実に豊かな低音だと思っていたステレオからこれまた堂どうとした女性のラブロマンスのささやきであろう声が聞かれたらどう感じるだろうか。たいてい場合は音響というものはこういうものだ、それでも自分の好みで私はこれを選ぶというのなら仕方ない。裸の王様であればよいのだ。

ザ・スコラーズ

これまでくどいように人間の声と再生装置、それに検聴法を述べて来た。というのも今回私達が手にしたスコラーズの一枚のレコードの持つ意味を深めるためのものと考えてのことである。

混声合唱が無伴奏で行なわれる。それも誰もが知っている歌ばかりである。親しみ易く、やさしい歌というのは実は音楽的に大変むずかしいものである。この歌唱を聞くとき自分も合わせて歌いたくなるというリラックスした雰囲気生まれればそれは成功ということだろう。スコラーズの判定は皆さんにおまかせしよう。

ところで、純粹に人間の声だけで構成される音楽を聞くにつけて、それらがいかにもオーディオ・チェックに適したものかが判って来る。スコラーズの生のステージの体験のない人でも、また言葉の意味が判らなくても、同じ人間としてどのような感情で歌われているものかがたちどころに判定できる。歌う側も聴く側も長い間を専門的に人間業をやっているからである。とりわけ民謡という分野の平易な発声法は、ベルカント唱法のように人体を器楽のような扱い方をしていないだけに自然にそのままを受け止めればよいのである。

歌のなかに歌う人の表情、顔かたちまでが浮かんでくるような自然な音声かどの歌唱にも折り込まれている。こうした自然さを出すことがこのDAMレコードの企画の意図でもあることなのであろう。

意志の力強さを感じさせる声も聞き分けることも楽しいが、逆に響きを整えることにだけ集中したために声に感情がこめられない部分もあることがレコードの中から聞えて来る。こうした人間の喜怒哀楽の感情が再生音のうえにどれほどこめられて来るか。これこそアナログやデジタルという方式を問わず、レコードに厳しく求められる一番大切な要件であると思うのだ。



カッティング・データ

Cutting	: TOSHIBA-EMI Cutting Room
Cutting Date	: May 7, 1986
Tape Recorder	: STUDER A80MKII (76cm/sec. 2ch)
Drive Amp.	: Neumann SAL-74B
Cutting Lathe	: Neumann VMS-80
Cutting Head	: Neumann SX-74
	Diamond Cutting Stylus
	Non Limiter
	Non Equalizer

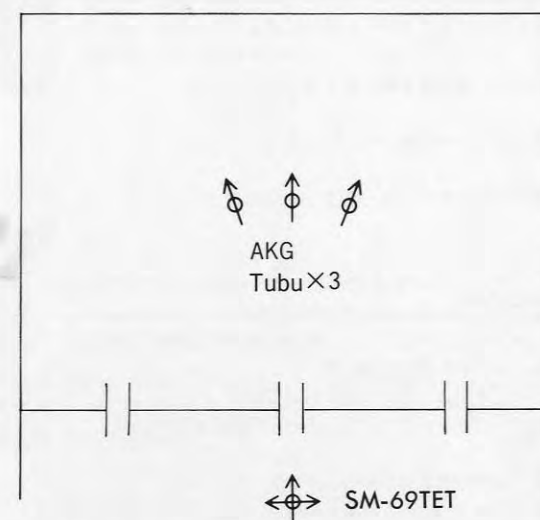
スタッフ

プロデューサー……………鈴木武昭
ディレクター……………中田基彦
バランス・エンジニア……………池田 彰
デザイン……………東芝EMI(株)デザイン室
カメラ……………堀田正實
録音協力……………サウンド・クリエーター
録音場所…アビラック・ミュージック・コミュニティ・センター
《バリオ・ホール》
S. 61. 1. 13 & 15

企画・制作……………第一家庭電器DAM
製 造……………東芝EMI株式会社



マイク・セッティング



ブロック・ダイアグラム

